

笹川平和財団「現代若手中東研究会」の第1回研究会では、15分間で、現在取り組んでいる博論研究の概観を簡短に報告した。まずは、報告内容を要約して示したい。

政教二項対立論の観点からある国家や社会の世俗化の程度を見定めるだけの研究は、すでに痛烈に批判されてきた。代わりに、「宗教」「イスラーム」の領域に統治の観点から介入する近代国家の権力に着目することが提起された。しかし、主にポストコロニアル研究において、そのような議論は「近代国家の権力」の自律的・支配的性質を強調し過ぎているという批判が徐々に積み重ねられていく。つまり、エドワード・サイードやミシェル・フーコー流に定式化された「西洋」やそれに影響を受けた「統治権力」「近代国家」を主語にした議論ではなく、植民地主義を経験した様々な人たちの主体性を考慮した議論が行われるべきであり、そこから植民地化された非西洋地域の国家や社会の複雑さを捉え直していくことが必要だと主張されるようになった。

以上を踏まえ、報告者の研究は、19世紀後半以降の植民地主義の浸透を背景として1920~30年代に国民国家エジプトの形成に携わった現地の政治主体たちに着目する。特に、彼らが、「政治」をどうあるべきだと考え、「宗教」「イスラーム」をどのように位置づけようとしたのかを明らかにすることを試みる。この点で報告者の研究は、西洋の歴史的認識に由来する政教二項対立的な枠組みから近代エジプトを分析するものではない。また、宗教を定義する「近代国家」像を示すだけに留まるものでもない。この研究では、「近代国家」の構築を強制する植民地的近代という歴史的条件と、その条件を前にした現地の政治主体たちの政教をめぐる批判的な諸認識、すなわち「政」「教」を考察していくことを目指している。

19世紀後半・20世紀初頭のエジプトは非常に重層的な地域であった。イギリス軍事占領期に事実上のエジプト支配者であった総領事クローマーの言葉を借りれば、そこには農民、遊牧民、シャイフ、コプトだけでなくトルコ系のパシャやシリア人、ユダヤ人、ギリシア人、そしてアルメニア人やヨーロッパ人たちがいた。イギリス植民地行政官たちは、この重層性を解消し、エジプトにもイギリスやフランスのような同質的な国民国家を形成しようとする。例えば、宗教的多数派＝ムスリムと、宗教的少数派＝コプトを国民国家エジプトの主要構成員とし、国民国家の枠組みにおいて宗教的差異を超えたエジプト国民を創出しようとしたのである。

現地の政治主体は、名目的な独立を達成した1922年以降、以上のようなイギリス主導の植民地主義的プロジェクトを背景に国民国家エジプトの形成に着手した。例えば、1923年憲法の作成に携わった委員会メンバー、1924年以降の政党政治に参加した国会議員、法の健全な執行に責任をもつ裁判官・法律家たちである。彼らの国民国家形成をめぐる議論から、大きく二つの政教観を看取できる。一つ目は近代西欧で想像された自律的な個人をベースに社会・国家を捉える西欧的な政教観であり、二つ目はエジプト地域を主体的に生きる人間（ムスリム・非ムスリム）をベースに社会・国家を捉える、いわゆる社会学的な政教観である。

報告者は、国民国家エジプトの形成に携わった政治主体たちは、この二つの観点のどちらかに偏っていたわけではなく、むしろ両者を持ち合わせており、ときの政情・個別的経験に応じてそれらを変化させたり使い分けたりしていたと考えている。いいかえれば、彼らは西欧モデルの国民国家を完全に否定せず、むしろ自地域の慣習・伝統と引照した上でその再構成に努めていた。これまで、1920年代から30年代前半は、政教二項対立論の観点から、リベラリズムの受容や世俗化が頂点に達した時代と論じられてきた。そうではなく、この時代を植民地的近代として捉え直し、西欧モデルの国民国家の半ば強制的な構築の過程において、現地の政治主体たちのあいだに顕在化した問題意識や価値観それ自体を理解し明らかにしていくことが重要であろう。

現代若手中東研究会は、専門分野を問わず現代中東を研究している若手研究者が集う知的交流の場としてつくられた。報告者が普段過ごしている環境には、近現代におけるイスラームを研究主題とする者が決して多くはない。それゆえに、以上のような報告に対し、専門地域やディサプリンを異にしながらも、中東・イスラームについて批判的な思考をする研究者から数多くの刺激的なコメントを受けたのは、研究を深化させていく上で非常に有益かつ貴重なことであった。特にコメンテーターとしてご参加くださった末近浩太先生と横田貴之先生のコメントは非常に励みになり、襟をたださねばならぬ気持ちがあった。

今回の研究会は予定よりも30分をこえたものであったが、個人的にはそれでも短く感じた。先生方や若手研究者の方々ともう少し議論・意見交換をする時間があっても良かったと思った。それだけ自身にとって有意義な場であった。是非、今後の研究会にも参加したいと思う。

最後に、コロナ禍においても本研究会のような学術的交流の場の構築・運営にご尽力くださった先生方やスタッフの皆様に感謝申し上げたい。

佐藤友紀（東京大学大学院総合文化研究科・博士課程、日本学術振興会特別研究員 DC）